

## 緊急気道確保を必要とした両側顎下部間隙膿瘍の1症例

松本理佐<sup>1)</sup> 塩盛輝夫<sup>2)</sup> 花栗誠<sup>2)</sup>  
竹内頌子<sup>1)</sup> 三箇敏昭<sup>2)</sup> 鈴木秀明<sup>1)</sup>

1) 産業医科大学病院耳鼻咽喉科

2) 九州労災病院耳鼻咽喉科

顎下部間隙膿瘍は口腔底蜂窩織炎あるいは Ludwig アンギナのことであり、誘因として扁桃炎、齲歯が多い。また本疾患は早期に炎症が周囲に波及し、喉頭に炎症が及べば気道閉塞をきたすことがある。今回下顎の両齲歯より両側の顎下部間隙膿瘍を形成し、緊急気道確保を必要とした症例を経験したので報告する。症例は54歳、男性。2008年10月より近医歯科にて両側齲歯の治療中であった。12月29日より右下顎部の痛み、腫脹が出現し、開口障害も認めため、2009年1月1日当院救外受診、鎮痛薬投与にて帰宅したが、疼痛継続のため1月2日再診した。血液検査にてWBC11400、CRP36.8と上昇しており、単純CTで右顎下部膿瘍を疑われたため外科で点滴入院となった。1月3日左顎下部腫脹も認め、症状増悪にて1月5日当科へ紹介された。両側顎下部間隙膿瘍、喉頭浮腫と診断し、即日ラリゲルマスク下気管切開、深頸部切開排膿術を行った。抗菌薬の点滴継続、洗浄にて症状軽快し、2月2日退院となった。退院後歯科受診し、以後再発の兆候は無い。